


日本初の人口センサスをプロデュースした杉亨二の功績

奥積 雅彦（総務省統計研究研修所教官）

杉亨二の功績等については、統計図書館ミニトピックスNo.13 など¹で紹介したところですが、本稿では、叙勲関係文書における杉亨二の功績に係るトピックスを紹介します。

1 杉亨二の叙勲の受章履歴²

杉亨二の叙勲の受章歴は、次のとおりです。

<small>すぎこうじ</small> 杉亨二 （1828～1917） ³	
明治 15 年（1882 年）12 月 勲五等に叙せられ旭日双光章を授典	
明治 35 年（1902 年）12 月 勲三等に叙せられ瑞宝章を授典	
大正 4 年（1915 年）11 月 勲二等に叙せられ瑞宝章を授典	

2 叙勲関係文書にみる杉亨二の功績

叙勲関係文書における杉亨二の功績の要旨は次のとおりです。

- ・ 日本政表を刊行、人別調（人口センサス）の実施により、官庁統計事業の基礎を築く
- ・ 共立統計学校を開設し、教授長として人材育成に携わる
- ・ 統計団体の代表として学術の研究・普及に携わる

3 杉亨二の功績を記した叙勲関係文書（その 1）⁴

杉亨二が明治 35 年（1902 年）12 月 15 日に勲三等に叙せられるに際しての叙勲裁可書における同人の功績を記した部分は、次のとおりです。同文書中「まよ將に全国に国勢調査を施行せられんとするに当り」とあり、国勢調査ニ関スル法律（明治 35 年法律第 49 号）が官報（参考参照）に公布された直後のことです。

【叙勲裁可書】

（筆者が原文のカタカナをひらがな表記にし、旧字体はできるだけ新字体にし、句読点、ルビ等を付しました。）

杉亨二は、少時（幼少の時）蘭学を修め、海外の事情を調査し、夙に（早くから）統計の必要を感じ、専心之を攻究し、明治二年静岡に在て藩主の為に始めて新主義の政表調べ（人口センサス）を策し、翌三年徴されて民部省に出仕し、熱心又政表の事を建議し、越て四年正院大主記に任ぜられ、日本政表及国勢要覧編纂の事に従ひ、五年政表成りて之を公刊せらる。爾

¹ 統計図書館ミニトピックス <https://www.stat.go.jp/library/index.html>

・ No.13 「杉亨二の DNA を引き継いだ国勢調査」（杉亨二のプロフィールを含む）

・ No.6 「表紀提綱について」（同）

² 【参考資料】：国立公文書館デジタルアーカイブ、「杉亨二自叙伝」（国立国会図書館デジタルコレクション）

³ 【写真】：国立国会図書館HP 「近代日本人の肖像」

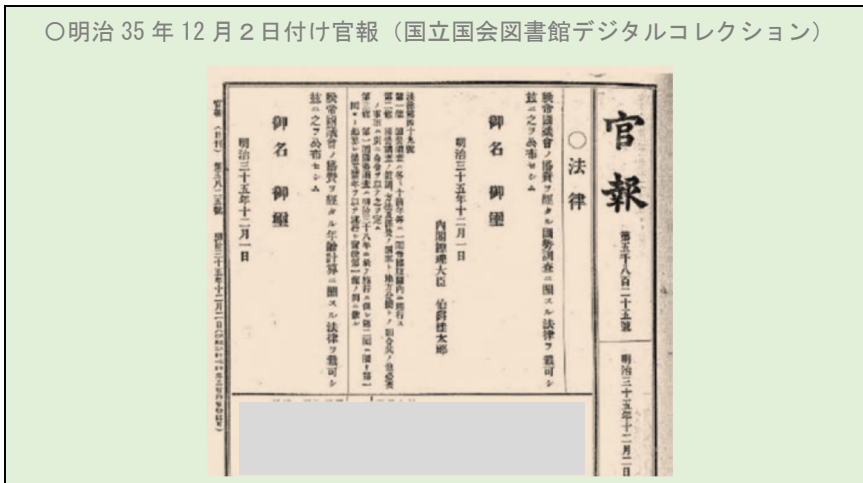
⁴ 国立公文書館デジタルアーカイブ 「正五位勲五等杉亨二叙勲ノ件」

来数官に歴任して権大書記官となり、数年間毎年之が編製刊行に励精せり。當時尚ほ維新草創の際材料に乏しく其の載する所国家現象の一斑（全体の中の一部）に過ぎずと雖も其の目的は漸次全国の大勢を表示するに在ること唱道せり。殊に人別調（人口センサス）は其の最も熱心に主唱せる處ところにして明治十二年廟議之を甲斐国に試行することを決するや同人之を担当し、十五年に至りて完成公布せらる。是より先十四年六月統計院を置かれ、同院大書記官となり。十八年十二月廃官となり退職せり。夫れ斯の同人は、官府の統計事業創設に関し、直接じんすい尽瘁（自分の労苦を顧みることなく、全力を尽くすこと）したるのみならず、又斯学の発達に力を尽し、常に僚属を啓発し或は統計学校の教授長となりて教務を統督し、或は統計学社の社長となりて学術の研究及普及を謀り、或は統計協会等に於て統計の講話記述を為し貢献する處少からず。其の本邦官府統計事業を創設し、其の基礎を究むるに於て、同人のちゆうさく籌策（はかりごと）与えて力あり。今や此の事業発達し、將に全国に国勢調査を施行せられんとするに当り、曩まきに編製したる人別調は考証上殊に有益なる材料となるに至りたる等其功績顯著なりと確認す。則ち勲等を擬議ぎぎ（さまざまに論議すること）する左の如し。

叙勲三等授瑞宝章

【参考】国勢調査二関スル法律（明治 35 年法律第 49 号）【制定時】

○明治 35 年 12 月 2 日付け官報（国立国会図書館デジタルコレクション）



4 杉亨二の功績を記した叙勲関係文書（その 2）⁵

杉亨二が大正 4 年（1915 年）11 月 10 日勲二等に叙せられるに際し、同年 10 月に文部大臣高田早苗発内閣総理大臣大隈重信あて上奏された文書（件名：「杉亨二外四名叙勲二付上奏ノ件」）における杉亨二の功績を記した部分は、次のとおりです。

【上奏文書】

（筆者が原文のカタカナをひらがな表記にし、旧字体はできるだけ新字体にし、句読点、ルビ等を付しました。）

帝国学士院会員正五位勲三等法学博士杉亨二

叙勲二等授瑞宝章

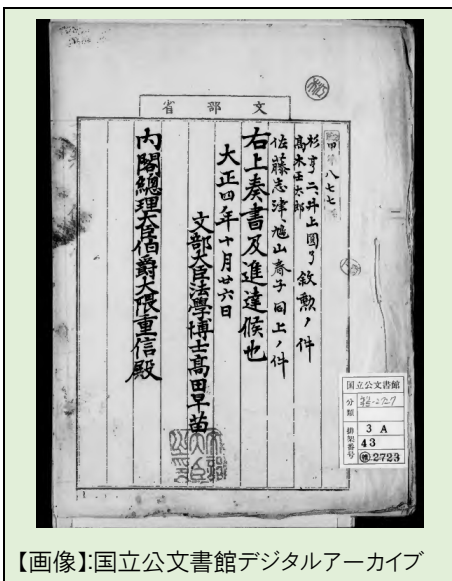
右は少にして蘭学を学び、医学を修め、緒方洪庵、村田徹齋等の塾に歴遊、し又夙つとに海外の事情に着目研究す。尋たずねて幕府番書調所ほんしょしらべしょに出仕し、開成所の教授職に挙げらるるや各国の新聞紙を閲し、統計に着眼し、後和蘭オランダの統計書を得て益々統計の必要を感じたり。然るに当時就て学ぶべき者なく僅に海外より帰朝したる諸士に就き、有六年余の久しきに亘

⁵ 国立公文書館デジタルアーカイブ「[杉亨二外四名叙勲二付上奏ノ件]」

り、学事上の討議評論に^{あずか}与り、又^{しばしば}屢々専攻に属する學術の講演を為し、或は論文を寄せ以て^{よく}克其職責を尽し、學術上に^{ひえき}裨益（役に立つこと）する所^{せんしょう}鮮少（わずか）ならず。之より先、明治三年七月民部省出仕と為り、累進して統計院大書記官に至り、同十八年十二月官衙（^{かんが}官庁）改正に依り廢官と為るに至るまで十有五年余の久しき常に官府統計の重任に^{あた}膺り、当時維新草創の際に属し、諸般の制度未だ備はらず其材料を得るの途亦易からざるの秋に於て自ら調査の難局に当り、其順序方法を攻究し、部下諸員を督励し、漸次完全の域に進み、以て今日の官府統計の基礎を開きたるもの其功^{すくな}尠（すくな）からずと謂ふべし。加之明治九年二月「スタチスチック」社を創設し、統計の學術、事務の研究及普及を図り、後ち統計学社と改称し、今尚其社長たり。又同十六年九月共立統計学校の開設を見るや推されて教授と為り、専ら教務を統督し、生徒を指導せり。今日官府其他民間に在りて統計に従事する者は多く其薰陶を受けたるものとす。其他新聞紙に雑誌に演説に其意見を發表し、世に資益する所^{すくな}尠（すくな）からず、^か斯くの如く統計学界の^{たいと}泰斗（その道の大家）として我邦教育及學術上に貢献したる功績^{まこと}洵に顕著なりとす。依て今秋行はせられる御大典に際し、特に頭書の通叙勲の榮を与へられんことを茲^{こゝ}に謹で奏す。

5 おわりに

叙勲関係文書からも杉亨二の統計愛をうかがい知ることができます。ちなみに、前掲の大正4年（1915年）10月の上奏文書は、次の画像のとおり内閣総理大臣大隈重信あてです。大隈は、統計を重視した総理の一人であり、杉亨二が在籍した統計院の初代院長でもありました。これも何かの縁でしょうか？



【画像】:国立公文書館デジタルアーカイブ